

ハワード・ジェイコブソン作 *Kalooki Nights* ——イギリスのユダヤ系作家のユーモアとイディッシュ語——

広瀬 佳司*

Howard Jacobson's *Kalooki Nights*:
 A British Jewish Writer's Sense of Humor and Yiddish

Yoshiji HIROSE

Howard Jacobson (1942-) is a Man Booker Prize-winning British Jewish author and journalist. He has been compared to the prominent Jewish American novelist Philip Roth. Jacobson is well known for writing comic novels dealing with the dilemmas of British Jewish characters.

Male-female relations are often themes in his work as seen in *Kalooki Nights* (2006). Another characteristic of his novels is that they reveal the modern Jewish experience in Great Britain, which is greatly different from its counterpart in America. He explains about his work that "comedy is a very important part of what I do." To evoke the sense of old Jewish culture, Jacobson often intertwines Yiddish expressions with his literary themes.

In *Kalooki Nights*, Jacobson deals with the grave theme of parricide in an Orthodox Jewish family. He minutely delineates the psychotic criminal psychology of Manny, one of the protagonists, through the lenses of Max, the non-religious first-person Jewish narrator and other protagonist. In the process of investigating the cause of Manny's crime, Max unexpectedly realizes an analogy between Manny and himself: their hatred toward Judaism. As a result of losing their faith in God, both of them are on the verge of losing their Jewish identity in the British society. After they have lost their belief in God and Judaism, the only connection they feel to traditional Jewish culture is through their spontaneous Yiddish expressions and their Jewish sense of humor. Therefore, in this paper, I would like to illuminate the identity crisis of the two protagonists through an analysis of the symbolic meaning of Yiddish and their sense of humor.

Key words: Howard Jacobson, British Jewish Writer, Yiddish

キーワード：ハロルド・ジェイコブソン，イギリス・ユダヤ系作家，イディッシュ語

* 本学文学部英語英文学科

序

ユダヤ系といえば一般にユダヤ系アメリカ作家を連想するのが普通である。イギリスにはこれまでハロルド・ピンター (Harold Pinter, 1930-2008) のような劇作家がユダヤ系として知られるが、格別にユダヤ的な世界観は感じられない。象徴的なレベルといえば事情はことなるが、具体的なユダヤ人社会には触れていない。イギリスにおけるユダヤ人の人口 (50万) とアメリカにおけるユダヤ人の人口 (600万) を比較すればいうまでもないが、イギリスのユダヤ人社会は決して大きなものではない。当然のことながら、こうした社会事情が文学にも反映されていると考えられる。そんななかで、イギリスのユダヤ人社会にハワード・ジェイコブソン (Howard Jacobson 1942-) が登場したのは驚きである。

ジェイコブソンはプレストウィック (Prestwich) に生まれ育ち、ケンブリッジ大学へ進学。ケンブリッジ大学では、『偉大なる伝統』 (*The Great Tradition*) で日本でも有名なイギリスを代表する世界的な英文学者リーヴィス (F. R. Leavis 1895-1978) 教授の下で英文学を学ぶ。そのせいか、ジェイコブソンは宗教的なユダヤ人とはかけ離れている。しかしながら、やはりユダヤ・ユーモアという意味ではきわめてユダヤ人的なセンスを持つ作家である。インタビューの中で彼は、自分の文学的な特徴について次のように述べている。

“I’m not by any means conventionally Jewish. I don’t go to shul. What I feel is that I have a Jewish mind, I have a Jewish intelligence. I feel linked to previous Jewish minds of the past. I don’t know what kind of trouble this gets somebody into, a disputatious mind. What a Jew is has been made by the experience of 5,000 years, that’s what shapes the Jewish sense of humor, that’s what shaped Jewish pugnacity or tenaciousness. . . . comedy is a very important part of what I do.”¹ (Manus , April 2009)

ここにもあるように、ジェイコブソンは決して伝統的なユダヤ教に従い、毎週ユダヤ教会堂で祈りを捧げるようなユダヤ人ではない。しかしながら、先祖伝来のユダヤ人の知性を有しているというのだ。彼自身がここで認めるように、5千年の経験から生み出された、ユダヤ人の知性とユーモア精神を引き継いでいるのがジェイコブソンである。

ジェイコブソンが、自らの出自を意識しユダヤ的ユーモアを作品中に生かしているのは明らかである。イディッシュ語表現を多用し、それもアメリカのユダヤ系作家のように前後に英語の訳や説明をほとんど挟まない。ある意味で、イギリスの英語国民に対しては閉ざされている部分があるといえよう。しかし、同時にその辺がジェイコブソンの斬新な文体の特徴になり、英文にイディッシュ語表現を織り交ぜることで独特な陰翳を醸し出しているのは確かだ。

ジェイコブソンの小説は1983年の *Coming From Behind* を皮切りに、11冊出版されている。そして、2010年に、結婚生活における男女関係の機微を描いた傑作 *The Finkler Question* で “the Man Booker Prize” を受賞した。本論では、2006年に出版されたホロコーストに関連したテーマを扱う *Kalooki Nights*² を中心にジェイコブソンの文学世界のイディッシュ語表現に着目して、そのユーモアの意味を考えたい。彼はしばしばアメリカ作家のフィリップ・

ロス (Philip Roth) に比較される。痛烈な皮肉が随所に見られるところや、ユダヤ的なユーモアを武器にしている点では類似している。そのロスが2011年の“the Man Booker Prize”を受賞したのは偶然ではないような気さえする。

1 両親殺しのテーマ

この作品のテーマはユダヤ社会における親殺しと、その謎である。「出エジプト記」にあるように、「あなたの父母を敬え。そうすればあなたの神、主が与えられる土地に長く生きることができる。」(出エジプト記 20:12) ユダヤ教では親を敬うことが十戒にある。また「殺してはいけない。」(出エジプト記 20:13)と続いている。十戒の中の二つの禁止事項を破り、両親殺害を犯した主人公の人生を、友人である一人称語り手「私」が語っていくという作品構造を持つ、私小説的な作品が *Kalooky Nights* だ。

「私」の幼友達マニー (Manny Washinsky) は、ユダヤ教正統派の一家で厳しくしつけられ育つ。近所で育った語り手の「私」ことマクシー (Maxie Glickman) の家はトランプゲーム「カローキー」に夢中になる語り手の母に象徴されるように、宗教とはおよそ関係のないユダヤ人一家である。その「私」とマニーの関係は途切れながらも最後まで「謎」を秘めながらも続いていく。

二人が初めて出会うのは、第二次世界大戦中のイギリスにあった防空壕の中であった。そこで二人は神について話し合う。正統派の教育のみを受けたマニーと世俗的な家で育ったマクシーでは議論が噛みあわないことは言うまでもない。マクシーの父親は、もともとボクサーであった。その父は「人間と神との関係以上に常に大切なのが人間同士の関係である」(“Man and man will always be a more sacred connection than man and God.” 22) 父は息子であるマクシーに「懸命に自分の人生を見つめ、思った通りいけばよい」(“Grab at life, Maxie! Grab what you can see!” 37)。この父親から見ればマニーの家族はあまりにもユダヤ教正統派すぎる。一方、マニーにとっては正統派の考えこそが正しい。そんなワシンスキー一家を語り手の父親は“farshimelt” (narrowed) (37) というイディッシュ語であらわしている。ちょうど、ハイム・ポトク (Chaim Potok) が『選ばれしもの』(*The Chosen*, 1967)³ で描く正統派ハシド派のツァディック (tzadik 奇跡のラビ) の息子と自由な気風のユダヤ人として育った少年の対比が想起される。

非常に厳格なユダヤ教正統派であるワシンスキーの家庭環境が、ユダヤ社会における稀な両親殺しの犯罪を誘発したのかもしれない。

... the Warshinskys, though more formal and reserved, were somehow hotter, darker, a consequence, perhaps, of being as a family tragedies befell them, there was no divergence of view. (37)

グリックマン家とワシンスキー家の対照が「親殺し」という悲惨な事件の一因であったのかもしれない。この小説はマクシーが漫画家として成功してからも、マニーとの奇妙な関係を通じて、事の真相に迫ろうとする「私」によって作品に輪郭が与えられているのだ。

父親のみならず両家の母親もかなり対照的に描かれている。マニーの母はユダヤ教の伝統的な安息日を迎えるとき、何千年も続くユダヤ人の母親の儀式を大切にしている。ここでは、

正統派ユダヤ教の家で行われる儀式が描かれている。

... making those welcoming motions with her hands, as though to call on the angel of light to bless their bread and ignite their candles, before covering her eyes and delivering the blessing. (38)

正統派ユダヤ教の家庭では、宗教儀式の大半を父親が行うが、いくつかの例外もある。安息日に燭台のろうそくの上に両手をかざし天使を迎えるしぐさをし、蠟燭に灯をともし役割や、安息日の祝祷を唱えるのは一家の主婦の大切な役割である。家庭における重要な家族の要となっているのが母親なのだ。

これに対し、安息日でも祈ることを忘れ、カローキーというトランプゲームに夢中になっているマクシーの母の姿がユーモラスに描かれている。

True, my mother wove spells over her playing cards, but when she blew on her fingers and shuffled the decks my mother was commemorating the unbroken sameness of things, another night of kalooki in a life given over to kalooki. (38)

マニーの母親の安息日の厳粛な祈りを先導する姿と、「私」の母が決まってトランプにおまじないをかけトランプを切るその姿は、宗教世界と世俗世界の好対照である。

そもそも、マニーとマクシーが知り合うきっかけは、たまたまマニーの家の近所にマクシーの家族が引っ越し、近くに同年代の子供が他にいなかったことからマクシーの母親が強く勧めて二人は知り合うことになる。ところが今までも明らかなように両家はユダヤ人でありながらも極端に異なるために、最初からマクシーは父と同じ印象をマニーに抱いた。父の用いた“farshimelt”である。つまり、ここでの意味は“narrowed”という英語的な意味で用いられている。マニーの容貌は、まるで迫害の歴史を象徴でもするかのように描かれている。

He looked too historically Jewish for my liking. Too persecuted and unhealthy, his skin yellow and waxy, the colour of old candles. Farshimelt. (41)

この部分からも、父親のジャックが表現するようにいかにも暗く、陰気な感じが伝わる。正に「世の不幸をすべて一人で背負っている」ような表情をしているのがマニーである。母の勧めで出会った二人。「私」が漫画をマニーに貸すと、彼はお返しに『ナチス紋章卍の鞭』というホロコーストの陰惨な状況を伝える本を貸してくれた。この本のおかげで「私」は、ユダヤ人絶滅を支持する「ユダヤ人問題最終結論」(The Final Solution) について知ることになる。

2. ユダヤ人の悲劇とユーモア

1973年、すでにマニーもマクシーも二十代の青年になっている。1973年はマニーが両親

殺して逮捕された年でもある。また、マクシーにとっては最初の妻と離婚をした年である。歴史的にはイスラエルのヨム・キプル戦争（第5次中東戦争）もこの年に起きた。このことを踏まえてマクシーは皮肉に自分の運命をユダヤ悲劇と重ねる。

I was the fruit of Five Thousand Years of Bitterness which meant that I was heir to Five Thousand Years of Jokes. (47)

ユダヤ人の5千年の悲運と自分の離婚問題が同次元で扱われている点はいかにもユダヤ人らしいユーモアに満ち溢れた言説である。それと同時に、ユダヤ系作家の歴史感覚を強く感じないではいられない。マニーに見られる、“farshimelt”の感覚がこれによるものであることは確かである。つまり、ユダヤ人として生まれることは、個人の歴史とともに、民族の5千年の歴史も生きなければならないということなのだ。

マニーことエマニュエル・エリ・ワシンスキー (Emanuel Eli Warshinsky) にはアッシャー (Asher) という6歳ほど年上の兄がいた。「私」とは年が違い幼い時の記憶はほとんどないが、実はこの兄の存在がマニーの両親殺しには深いかわりを持つ。この点が作品を通して最後まで問題となるのだ。この兄アッシャーは教え方の上手いトラー (モーセ五書) の教師をしていた。教え方も上手で子供からの人気も高かったのだが、彼はかなり年上の非ユダヤ人女性 (shikseh) と関係を持ち両親から勘当されてしまう。このことで一家は今までの敬虔な家庭という評判を一気に失った。

「私」にとっては、幼いころマニーの家庭がうらやましく思えた。それは、彼の家にあるユダヤ正統派家庭に見られる強い絆であった。語り手「私」の家は対照的にユダヤ人家庭でありながら、父はボクシングをし、母は知人を集めてのトランプゲームであるカローキーに夢中になっている。

しかし、皮肉にもマニーの兄が、再び別の非ユダヤ教の女性を愛することから揺るぎないように見えた正統派の家庭が内部から崩れだし、それがマニーの両親殺しを誘発することになる。事件後、二人の息子にとって両親の正統派の生活が耐え難い重荷であったことが判明する。

語り手「私」の父親は、経済的な理由からか共産党員の仲間ですら勧めたにもかかわらず、息子にユダヤ教の成人式である「バル・ミツヴァ」を受けさせていない。このように、ユダヤ教の儀式を完全に無視した。そうした教育の当然の結果であろう、「私」ことマクシーは非ユダヤ人と二度も結婚し、離婚する。しかし、マニーの父親がマクシーのような世俗的な人物であれば、おそらく彼の両親殺しということは起こりえないことだったかもしれない。

マニーの父親は仕立屋として働く、ネコ背で青白い不健康な顔色の男性であった。マニーの兄アッシャーはこともあろうにドイツ人の恋人ドロシー (Dorothy) を連れて帰る。これでワシンスキー家は決定的な崩壊をたどることになる。アッシャーの両親は何とか二人を別れさせようとする。ホロコースト以後のユダヤ人がドイツを、そしてドイツ人をいかに嫌っているかは日本人には想像しがたいかも知れない。今でも、筆者が出会うアメリカの年配のユダヤ人が多くの割合でドイツへの恨みや、アレルギーにも似た感情を強く抱いているようだ。これは、たとえてみれば中国における根強い反日感情にも似たところがある。

アッシャーがドイツ人女性の恋人を連れて帰ると、彼の母親は驚きを露わにして、父親には話してはいけないと息子を止める。しかし、アッシャーの父もすぐにそのことを知ることになり、懸念された通り父親はショックのあまり文字通り卒倒する。この状況までも「語り手」はジョークにしてしまう。ワシンスキー氏の脳卒中に関して、常套的なユダヤ・ジョークにまとめている。

But later that same week his father got to hear about it anyway, and had what was diagnosed in our community as a double stroke. One on discovering his son was sleeping with a shikseh. One on discovering that the shikseh was a German. By our understanding of medicine, it was the second stroke that saved him from the worst effects of the first. Sometimes the news can be bad that you go on living. Especially when going on living is worse than death.

The doctors said that Selick Washinsky had suffered a minor stroke. There you are! That was how terrible things were. (200)

二度の卒中などにはありえないが、ユーモアにするにはこうするしかない。一度目は息子が非ユダヤ人と寝ていることを知らされたとき。二度目は、その相手がともあろうにドイツ女性であるということを知った時である。父親にとって息子がドイツ女性と関係を持つということは想像しがたい「悪夢」であるので、最初の非ユダヤ人と関係を持つという悪い知らせが打ち消され、ゼリック・ワシンスキーは死を免れたという。(ユダヤ人)医者も、だから状況が最悪であると述べる、というオチがつく。この部分を医学的に証明する必要などまったくない。これが、ユダヤ人の笑いの強靱さである。死という現実を目の前にしても、決してそれをただ深刻化することをしない。だからといって、ユダヤ人社会が非人情的であるということではない。5千年に及ぶ迫害の歴史から必然的に生み出された生き抜く技術であろう。どのような状況にも絶望しない力強さと積極性を感じずにはられない。

両親によってアッシャーとドイツ女性ドロシーは引き離されてしまう。アッシャーはやせ細り、毎晩泣き明かし、その鳴き声をマニーは聞いていた。挙句の果てに、アッシャーは肺病の患者専用のチェッシャーにある療養所へ送られた。このことが後にマニーを両親殺害へと駆り立てる。この時から、マニーは両親を憎み、ユダヤの神への信仰を失うことになる。“That was why Manny grew to hate his parents, and to lose his faith in G-god. The way he talked, the two were interchangeable” (235). 両親への思いと神への信仰が同次元で捉えられていることにも注目したい。つまり、両親を否定することは、信仰心、つまり神の否定でもあるのだ。

3. 結婚と反ユダヤ主義

マクシーの最初の妻クロエ・アンダーソン (Chloë Anderson) は、本当はユダヤ人が嫌いだ、カトリックの教育を受けることでユダヤ人への懺悔 (penance) の気持ちから「私」と結婚したという。確かに、そのことを裏付ける彼女の激しいユダヤ人への反感

が見られる。

妻クローエは、漫画家としてまだ売れていない「私」にメルセデス・ベンツを買ってとせがむが、「私」は無理なので断ると、それがドイツ車であるから買わないのだと彼女は決めつける。

“Too flash,” I told her.

“You mean too foreign.”

“No, I don’t. I mean too bourgeois.”

“There you are, you’ve agreed with me. Too foreign. Too burgerlich.”

“Nothing to do with foreign. We could have a Renault.”

“So we can have French but not German.”

“What’s Germany got to do with it, Chloë?”

“With ‘it’, nothing. With you, everything. Why can’t you let the subject drop, Maxie?”

“Five Thousand Years of Bitterness, Five Thousand Years of Bitterness . . .”

“That’s no exclusively Germany.”

“No, just the last five hundred years of it.”

So to prove Germany wasn’t a problem I relented, or she relented, and we bought a Volkswagen Beetle. (155)

最初の妻クローエに明らかに見られるユダヤ人への強い偏見である。

「私」の父は幼ない時からマクシーに、亡くなってしまった過去に拘泥することなく未来志向で生きるように教育を施した。“Let the dead bury the dead, was his position” (7). 息子マクシーに言い聞かせた言葉は “I expect you to embrace life with both hands” (7). この結果、マクシーはユダヤ教を離れて漫画家の道を選んだのであろう。

それにもかかわらず、マクシーには非常にユダヤ的な特徴がある。第一に、被害者意識、第二に、自らの悲劇を茶化すようなジョーク、第三に、「神さま、なぜ私を見捨てたのか？」という疑問である。非ユダヤ人妻クローエは、そうした「私」の極めてユダヤ人的な反応に耐えられず、離婚し去っていく。「私」は父母の世俗的な教育にもかかわらず、キリストの叫び「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」（「マタイ」27：46）という言葉の聞こえと涙するのであった。これは皮肉にも、ユダヤ民族の味わった迫害の歴史、とりわけホロコーストへの連想へと繋がる。「私」は、キリストの言葉を小声でドイツ語に翻訳しジョークにしてしまう。“Mein Gott, mein Gott, warum hast du mich verlassen?” (10) と小声で口にする。カトリックの教育の影響でユダヤ人への懺悔の念を抱くクローエにとれば、夫のジョークは耐え難いことが容易に理解できる。“Jew, Jew, Jew. Joke, joke, joke. Warum, warum, warum? For which Chloë, weary with all three, was leaving me” (10). これが二人の離婚の原因である。ユダヤ人のジョークが鋭い刃となり妻のクローエを傷つけたことは疑いのないことであろう。

マクシーの二番目の妻ゾウイ (Zoë) は黒人で、かつてユダヤ人に女中として仕えた苦々しい経験があった。友人であったユダヤ人男性たちにも弄ばれた過去があり、ユダヤ人を

憎むようになった。どうもそれが「私」と結婚した理由であったようだ。そして「私」に美容整形でユダヤ人の特徴を変えるようにさえ要求するのだ。

マクシーの二番目の非ユダヤ人妻が夫に対して披露する何気ないジョークにも、ユダヤ人のホロコーストへの強い感情的な反応をせせら笑うような態度が表れている。ゾウイが「私」の感情を無視して次のように謎かけする。「いったいどれだけのユダヤ人が一台のフォルクスワーゲン車に乗れますか？」（“How many Jews can you get into a Volkswagen Beetle?” she asked.” 137). すると即座にユダヤ・ジョークでマクシーは答える。「一人もいないよ。フォルクスワーゲンなんてユダヤ人は乗らないからね」（“None. No Jew would get into a Volkswagen Beetle.” 137）きわめてユダヤ的な答えである。つまり、ユダヤ人がドイツ車など買うわけがないから、そんなことはありえないという、ユダヤ人のジョークである。しかし、ゾウイにはそのユダヤ的なジョークが伝わらない。逆に、彼女は話の腰を折られ腹を立てて言い返す。“One thousand and four. Two in the front, two in the back, and one thousand in the ashtray” (137). きわめて辛辣なブラック・ジョークである。前席に2人、後部座席に2人、あとは灰皿に千人。もちろん、“the ashtray”とは、「死の収容所」で焼かれた人々を暗示している。ゾウイのジョークにはユダヤ人への憎悪が見え隠れする。

アフリカ系イギリス人のゾウイは強烈な反ユダヤ主義者であるので、ユダヤ教の一神教の部分にも我慢がならない。多神教の文化で育ったゾウイには、ユダヤ教の一神教的な世界観が受け入れられないのだ。“You’d be healthier with more than one sort of god, Max” (280). と夫に進言すると、“We don’t have a pantheon. We have Elohim, full stop. I think that’s wiser myself” (280). と答える「私」。ここでも明らかのように、夫婦の問題の根本が宗教にある。ゾウイは、一神教を絶対視するユダヤ人に反発し、多神教的視点から批判をしている。それに対して、「私」はユダヤ人にはパンテオンのような神殿が無く、あるものはエロヒーム（ユダヤ教の絶対神）のみであるという主張である。2千年前にエルサレムの第二神殿をローマ軍に破壊されてから、ユダヤ民族は神殿を持たず流浪の民となった。物理的な神殿の代わりに、一神教の砦であるエロヒームを信仰するというユダヤ人の立場から議論する「私」も、宗教を捨てた者には思えないユダヤ性を窺わせる。マニー一家をあまりに“farshimelt”であると形容していた「私」であるが、非ユダヤ教の妻たちからの批判によって自分自身の中のユダヤ性に目覚める。

4. ユダヤ人の父と娘の関係

ユダヤ教世界の父と息子の関係はアブラハムとイサク、イサクとヤコブ、ヤコブとヨセフの関係に見られるように強い絆で結ばれている絶対的な関係である。作家ハワード・ジェイコブソンの描き出す大きな三つのモチーフは今まで述べてきたように、下記の通りである。

- ① ゼリック・ワシンスキーとマニー
- ② ゼリック・ワシンスキーとアッシャー
- ③ ジャック・グリックマンとシェイニー、及びマクシー

ゼリック・ワシンスキーにとってユダヤ教正統派以外の真実はありえない。すべてがユダ

ヤ律法に従いなされるべきものなのである。その彼の宗教観は二人の息子アッシャーとマニーに受け継がれたように表面的には見えた。対照的に「人間と神との関係以上に常に大切なのが人間同士の関係である」と強くマクシーに主張するジャック・グリックマンは、ユダヤ教に基づく宗教儀式には全く意味を見出さない。マクシーのユダヤ式成人式「バル・ミツヴァ」もしなかった。ユダヤ人としては異常なことである。彼のかつての仲間であった共産主義運動家たちですら「バル・ミツヴァ」だけはするように勧めるがジャックはその助言にも決して従わなかった。

ジャックはゼリックと比較すれば、ほとんどユダヤ教とは関係していないといえるかもしれない。“My father was thinking up ways to make Jewishness less of a burden to the Jews” (7). ただ、注目したいのはジャックの用いるイディッシュ語の表現である。マニーがイディッシュ語の表現に特別な意味を付加するのは、かつての正統派ユダヤ人として理解できる。たとえば、出所してから「私」に再会した場面である。「散歩する」(“zikh arumdreyng” 278) というイディッシュ語の言葉がマニーの口から飛び出してくる。自分がまだ若い頃の ‘Yiddishism’ (ユダヤ文化) を覚えていたことに彼は満足そうな笑みを浮かべる。両親を殺害することでユダヤ教との絆も遮断されたが、文化コードとしてのイディッシュ語が無意識に出てきたことで、自分自身の過去との絆が瞬間ではあるが甦った。

同様に、あれほどユダヤ教を嫌っていたジャックが固執するのもイディッシュ語表現である。娘の名前シェイニー (Shani) とは、美しい (Shayn) というイディッシュ語にちなんだ名前であることは明らかである。作者ジェイコブソン自身にも、ジャックに共通するイディッシュ語への執着がみられる。よく知られるイディッシュ語のジョークを第7章の冒頭に用いている。

Chinese Husband: Honorable wife, I have heard you are having affair with Jewish man.

Chinese Wife: Honorable husband, I cannot think where you are getting these bobby meises from. (175)

この部分はかなりイディッシュ語に精通していなければ欧米のユダヤ人も理解不可能であろう。内容はこうだ。礼儀正しく中国人の夫が妻の不実を尋ねる。相手がどうもユダヤ人らしい。それに対して、妻も恭しく答える。ポイントはイディッシュ語 “bobby meises” (tall tale or fairy tale, Uriel Weinreich 79) である。一方、ロステン (Leo Rosten) の定義によれば “nonsense; something patently silly and untrue” (44). つまり、‘bobby meises’ という表現はイディッシュ語に精通した東欧・ロシア出身のユダヤ人しか用いないユダヤ人社会の内部者の暗号化した表現であるのだ。そのために、この中国人の女性がユダヤ人男性と親密な関係を持っていることを暗示していることの笑いである。イディッシュ語では「たわいもない話」「でたらめ」というニュアンスでよく用いられるのが ‘bobby meises’ なのだ。こうしたイディッシュ語表現を用いたユダヤ・ユーモアを作者ジェイコブソンは澄まし顔で用いている。

自然なイディッシュ語表現を英語に交えて用いるのが「私」の父親ジャックなのである。心臓発作で死期が近づく父は急に息子マクシーではなく、娘のシェイニーを頼りにして、

彼女を「可愛いお嬢ちゃん」(“shaineh maidel” 207)と父の先祖たちが用いていたイディッシュ語表現で嬉しそうに「私」の姉に呼びかける。つまり、姉は父にとって感傷的なユダヤ文化への絆を象徴する存在なのだ。(“the child of his Jewish sentimentality” 207)であるのだ。それに対して「私」は強い嫉妬を感じる。若い時は世俗的であった父も、自らの死期を悟るや急にユダヤ教の伝統文化に郷愁をそそられるのである。それがマクシーの姉へのイディッシュ語での呼びかけである。アメリカのユダヤ系女流作家パール・アブラハム (Pearl Abraham) が小説 *The Romance Reader* (1995)⁴ の中で描いているように、イディッシュ語でのユダヤ名はユダヤ人のアイデンティティを表明する重要な要素である。

“The Jews escaped slavery in Egypt because of three things [...] Name, dress, and language. You two call each other by your goyishe [gentile] names, Rachel instead of Ruchel; you speak a goyishe language; and now you’re changing the way you dress. I will not have any of that in this house. This is a Chassidische [Hasidic] home.” (Abraham 137)

これは、超正統派ハシド派の父親がアメリカ文化に同化した娘がユダヤ名を英語化していることに腹を立て叱る部分である。

両親殺しという大罪によって完全にユダヤ教の世界から隔絶されていたが、イディッシュ語という文化コードによって自らのアイデンティティを再確認するマニー・ワシンスキー。同じように、ユダヤ教に敬意すら払わず、ワシンスキー一家を“farshimelt”と批判し完全にイギリス文化に同化したはずのジャック・グリックマンの無意識裡の伝統への欲求がイディッシュ語の名前で娘を呼ぶことに表わされている。息子にバル・ミツヴァも施すことのなかった父親が死を目前にユダヤ伝統へ回帰していく姿に人間の「おかしさ」「哀しさ」が感じられよう。

5. 二人の主人公の共通性：揺らぐアイデンティティ

マニーがなぜ両親を殺害したのか、明瞭には語られていない。両親というよりも、彼の父親殺害がマニーにとっては意味深いことであろう。なぜなら、ドイツ人女性を愛した兄アッシャーを強く否定するのが父親だからである。最近の作品 *Finkler’s Question* の中でも、主人公の一人フィンクラーが、イギリスでの学問も修めているにも拘らず、商売のためにわざと無教養なユダヤ人を演じる父を軽蔑し、憎み、父の腹を殴る夢を見る。フィンクラーもマニーのように父親への殺意を抱いていた。ユダヤ教正統派の家庭においては、律法を象徴する父親像は、信仰心そのものでもある。つまり、父親像とはユダヤ宗教文化の象徴でもあるのだ。アイザック・シンガーの兄であるヨシュア・シンガーがユダヤ教の世界から飛び出すときにもそのような父親と息子の確執が見られる。⁵ その感情は、ユダヤ人であるということへの自己嫌悪感の歪んだ顕現でもあるようだ。

語り手「マクシー」のマニーへの関心はこの殺害の動機解明にある。閑静なユダヤ人コミュニティを揺るがす大事件の真相を究明する過程で語り手の立場は徐々に変化していく。つまり、両親殺しをしたマニーは狂人であると最初考えていたのだが、マニーの両親がアッシャーと彼の恋人ドロシーに何をしたのかを知るに従い、そのあまりに卑劣な手段

にマクシー自身も憤り、マニーの殺害ということが異常には感じられなくなる。それどころか、“No wonder he killed them. I’d have killed them had they been mine.”と、マニーの行為を正当化さえするようになる。

マクシーの叔父 (Ike) の元愛人であったドリー (Dolly) という女性は、イギリス生まれであるにも関わらず、戦前の東欧のシュテトル出身でもあるかのような雰囲気を持つ。マクシーは、そんな戦前の貧しいユダヤ社会の象徴でもあるかのようなドリーの孫娘アリス (Alÿs) という大学講師と出会い、図らずも三度目の結婚をする。この女性アリスもイディッシュ語で的確にその性格が表現されている。つねに、憂鬱病に苦しむ彼女は“dershlogn” (389) と表現される。ヴァインライヒの定義でいえば“dershlogn”とは“depressed, dejected, downhearted”という意味で用いられる。これはワシンスキー一家を“farshimelt”と形容していたイディッシュ語が連想される表現である。

マクシーの今迄の二人の妻は反ユダヤ主義的な非ユダヤ教徒であるのに対し、三番目の妻アリスは伝統的なユダヤ人である。バル・ミツヴァ (ユダヤ式成人式) も受けなかった彼が保守的なアリスと再婚することも興味深い。この妻は、マクシーを何とか再びユダヤ人の伝統の中へ引き込もうとする。

‘Some time in your life you jumped off the train that everybody else was travelling on, Max. It was your own decision. You can make the decision to jump back on agin.’

The train. Jew Jew, Jew Jew. (396)

今までの前妻たちの言葉と正反対に、ユダヤ人という血族の大河の中にマクシーを引きずり戻そうとするのが第三のユダヤ人妻アリスであった。マクシーは、迫害の歴史を喚起させるユダヤ的な憂愁に満ちた妻を“Wife of Sorrows” (397) と呼ぶ。アリスはあらゆる意味において伝統的なユダヤ女性であったのだ。アリスのユダヤ的な伝統意識がマクシーには耐えがたいものとなる。そして、それは彼女への憎悪へと変化する。

I hated her. All at once I realized how much and for how long I had hated her without knowing it.

The fucking lugubrious Jewess she was! Ghetto-laden, Holocaust-ridden, God-benighted, guilt-strewn, and now by that latest twist of morbid Jewish ingenuity, Jew-revolved. (399)

犠牲者としての哀れなユダヤ人女性像が窺える部分である。ゲットーの影、ホロコーストの影を帯びつつ、またイスラエル支持を明確に持ち合わすユダヤ人特有の現代性も併せ持つ彼女は、マクシーがすべて否定的である要素を内包する。結局二人は破局を迎え、彼女は出ていく。アリスのいない空間にマクシーは反ユダヤ主義的な気持ちを抱く。

I could smell her absence. It was like spring. I threw open all the windows and inhaled. Ah, yes, yes, yes!

Then I realized I knew what it was to be a Nazi. (401)

この反応は前妻たちが彼に取った態度に非常に近い、ホロコースト時期の反ユダヤ主義の立場でもある。これは想像以上の反ユダヤ主義的な言説である。これほどの表現はユダヤ系アメリカ人作家には決して見られない。実は、マクシーのこの立場こそ両親殺害を引き起こしたマニーに通じるものがあると思える。“dershlogn”は“Wife of Sorrows”につながるいかにもユダヤ人の迫害の伝統から生まれてきた気質的な憂鬱症を連想させる。ワシンスキー一家に漂う正統派ユダヤ社会の閉塞感とも同質の“farshimelt”な状況である。つまり、ユダヤ人でありながらバル・ミツヴァも受けさせてもらわなかったマクシーが伝統的なユダヤ社会を忌避するように、マニーは両親殺害によってその押しつけられた絶対的な信仰という殻から必死に逃げようとしたのだ。

ユダヤ系アメリカ作家のフィリップ・ロス以上にユダヤ人特有の感傷的な傾向を極端に嫌うイギリスの現代ユダヤ人像が漫画家マクシーと両親殺害者マニーの中に見て取れる。一人称語り手であるマクシーの視点を即作者の視点であると結論付けるのは早計ではある。しかし、アメリカ作家には見られない反ユダヤ主義的な視点を交え作品が描かれているのは確かだ。伝統的なユダヤ社会にも与することもできないし、反ユダヤ主義世界観に同調する点はあるにしてもそこにも安住できない不安定な状態にある二人の主人公の姿が浮き彫りにされている。

マニーの兄アッシャーの死によって、ドイツ人のドロシーの人生は大きく影響を受ける。それを気の毒に思ったマクシーが、最後の場面で彼女の忍耐を評価するコメントをする。

“‘I am surprised,’ I said, ‘that you don’t curse us all for ruining your life.’” (472) と、ドロシーをユダヤ人的な立場から慰めるように声をかけると、予想に反してまったく逆の返答がドロシーから帰ってくる。‘My life?’ She seemed astonished I should suggest such a thing. ‘My life’s just a life. It’s your lives that are ruined’ (472). つまり、ドイツ女性の視点から見れば、彼女のアイデンティティは揺るぎないものである。ドロシーは、ドイツ人女性でありクリスチャンであり続けながら一つの人生の選択をただけであったのだ。一方、マニーもマクシーもユダヤ人社会から引き離され、同時にイギリス社会にも完全に身を置けない立場。マニーは“farshimelt”な正統派の家庭から、そして、マクシーは“dershlogn”なユダヤ人妻から解放されるものの、いまだ宙ぶらり状態にあるからだ。二人にわずかに残るユダヤ社会との絆は宗教ではなく、イディッシュ語に象徴されるユダヤ・ユーモア精神文化なのであろう。

Works Cited

Abraham, Pearl. *The Romance Reader*. New York: Riverhead Books, 1995.

Jacobson, Howard. *Kalooki Nights*. London: Vintage, 2006.

———. *The Finkler Qestion*. London: Bloomsbury Publishing Plc, 2010.

Manus, Elizabeth. "Something Jewish: Howard Jacobson Interview." http://www.somethingjewish.co.uk/articles/1185_howard_jacobson.htm. Retrieved 7 April 2009

Potok, Chaim. *The Chosen*. New York: Simon and Schuster, 1967.

———. *The Promise*. New York: Alfred A. Knopf, 1970.

Singer, Israel Joshua. *Of a World That Is No More*. 1946. New York: Faber & Faber, 1987.